

## 涙の真意

澁谷則治

——竜が吼える。

禍々しき竜が大地を轟かせ、街を焼く。

自らの存在をここに示す様に。

竜が吼える。

——竜が咆える。

神々しき竜が民を守り、魔を祓う。

相對する竜に何かを訴える様に。

竜が咆える。

——そして、二柱の竜が激突する。

——これは古き記憶か。

——それとも未来の記憶か。

「……あつ、起きました？」

頭に柔らく暖かい感触を覚えながら、アルフレッドは目を覚ます。膝枕だ。

サラは心配そうにアルフレッドの顔を覗きこみ、そして安堵する様に笑った。

「よかった……」

「俺は、寝てのか？」

「寝てたのか、じゃないですよ。みんな心配したんですからね」

もう日は暮れ、空は夕闇色に満ちている。

アルフレッドは自分がどうやら数十時間以上眠っていた事を理解した。

9つ目のキャッスルの主たるタナトスを破り、明日に控える冥王との決戦にむけての準備をしていた際にアルフレッドは倒れてしまったのだ。

「心配かけたみたいだな」

「まったくです、急に意識を失うんですもの。大体、自分の体の管理ができていないのが悪いのです。たまには私に頼るのではなく、自分で管理してほしいものですね。そもそも

「――」  
サラは説教じみた小言を並べる。いつもの光景だ。

だが、いつもと違う事が一つだけ。

「……？」

アルフレッドの頬に水滴が落ちる。涙だ。

小言をなおも言い続けるサラの目には涙が流れ、綺麗な顔をクシャクシャに歪ませていた。

あらゆるモノを清めし水の巫女の目には、仲間を想う涙であふれていた。

「本当に、本当に、心配したんですからね……！」

そこにいるのは決して煌びやかな『蒼天の神姫』などではなく、ただの『水天の少女』がそこにいた。仲間を想い、感情を露わにする一人の少女がそこにいた。

アルフレッドはこんなにも顔を歪ませるサラは見たことがなかった。サラが誰に対しても分け隔てない慈愛を持つ事をアルフレッドは知っていた。だが、そんな彼女が誰かに対してここまで涙を流す事などなかったのだ。

だから、アルフレッドは知ってしまった。この涙の意味を。そして、自分がどれだけ心配かけたかを。

「すまん」

「っ！？ な、なにを」

アルフレッドはサラの肩を抱き、ただ謝る事しか出来なかった。細く華奢な体が震えているのが伝わる。

「本当に、すまん」

「汚い、ですっ！ こんな、心配かけるだけかけといてこんなの……！ 私の気持ちを利用するような事……」

「すまない。そして、心配してくれてありがとう」

「ずるいですよ……」

サラの体の震えはいつの間にか収まっていた。

お互いの肌の温もりが重なり合う。それはいつまでも触れ合っていたくなるような、温かく、そして、甘美な――。

「これは幾らなんでも甘すぎじゃな。虫歯になってしまおうわ」

唐突の声。

夜のとばりが如き、黒き衣に身を包む女性が闇から姿を現す。

――ヨミだ。

「明日が決戦だからとて盛りおって。これじゃから人間というやつは」

「な、なんで、あなたがここにいるのですか？」

と、サラが問いかける。

「かかっ、前にも言ったじやろう。ワシはどこにでもいて、どこにでもいない存在じやと

な」

「？」

「分からぬならそれでよい。無理に理解することでもないのではな

ヨミはくくつ、と笑う。

ヨミは謎が多い存在で、度々会っているアルフレッドさえその全貌は掴みきれてはいなかった。

「要件はなんですか？ 無いのなら帰ってくれませんか」

「はっ、心配しなくとも用が済めば帰るわ、小娘。ワシが消えた後、存分に可愛がってもらえばよかろう？」

「っ！」

サラがヨミに殴りかかろうと拳を振り上げる。が、すんでの所をアルフレッドが止めにはいる。止めなければ殴り合い、否、殺し合いが始まっていた事だろう。

「冥王軍を庇うのですか、アルフレッド！」

サラは凄まじい形相でアルフレッドを睨む。

しかし、アルフレッドは首を横に振る。

「ちがう、殴れば、サラの綺麗な手が汚れてしまう。だから、拳を収めてくれないか？」

「……わかりました」

サラは握った拳を開き、肩を落とす。

「おお、こわいこわい。流星は蛮族の巫女というだけの事は——」

「それ以上言ったら殺すぞ、ヨミ」

アルフレッドはヨミに対して殺気を放つ。今にも切り伏せんばかりの殺気だ。

しかし、ヨミはそれに動じず、そして、どこか納得したように息を吐いた。

「……アルフレッド、やはり貴様、竜と契ったな？」

「それがどうかしたのか？」

「なあに、単純な興味よ」

ヨミはどこか意味を含んだ表情を浮かべる。普段の人を馬鹿にした様な笑みは消え、真剣な面持ちであった。

「……何の用だ？」

だからか、アルフレッドはヨミの見た事もない表情に興味を惹かれた。いつもならヨミの言葉などに聞く耳持たぬのだが、今回は「話ぐらいならば聞いてやってもいい」と、そう思えるほどに。

対して、ヨミはアルフレッドの変化に驚いたのか、目を丸める。そして、この機会を逃さんとばかりに本題を切り出した。

「——冥王と戦うのはやめる、アルフレッド」

「無理だ」

即答だ。

当然である。ここまで多大な犠牲を払いながらも9つのキャッスルを攻略してきた。残るは冥王が総べる城のみなのだ。明日で、全てが終わる。勝っても負けても。

だから――。

「ここで逃げる訳には行かないだろう」

「いいや、やめる」

ヨミはひかない。

ヨミは仮にも冥王軍である。その為にアルフレッドを戦場から遠ざけようとしているのかもしれない。

「俺はお前の命令は聴かない」

アルフレッドはそう言い放った。

ここで逃げるなどという選択肢などありはしないのだ。

「――では、私からのお願いではダメですか？」

「!?!」

ヨミとアルフレッドの会話に割り込んだのは、サラであった。

サラは自分の手を力いっぱい握りしめ、力のこもった目をアルフレッドに向ける。

「もうこれ以上、アルフレッドが傷つくのは見たくありません。だって、あと一つ、たったあと一つ城を攻略すれば終わるのでしょうか？ それなのになんで、こんなにもボロボロのアルフレッドが戦場に出なければいけないのですか!」

「サラ……」

アルフレッドにはサラの気持ちが痛いほど伝わっていた。

先ほどの涙や、この言葉を受けてサラがアルフレッドをどれだけ心配し、そして、どのような想いで戦っていたのか。それを理解出来ぬほど、アルフレッドは馬鹿ではなかったからだ。

「小娘もこう言っているようじゃし。やめたらどうじゃ？ 小娘と共に町に帰ればよいじやろうて」

「……ヨミ。お前はなんで俺をそこまで戦場から遠ざけようとするんだ？」

「そんなもの簡単じゃろう。わしはこれでも冥王軍の端くれ。自軍が有利になるように働きかけるのは当然の事じゃろう？」

ヨミはそう言った。先ほどの真剣な面持ちは消え、なにかを隠すように笑みを浮かべる。

アルフレッドはそれにはあえて触れず、自らの感情を吐露した。

「ヨミの真意は分からないし、サラのこれ以上悲しむ顔は見たくない。でも、俺は行かないやならない」

「なぜじゃ？」

「俺は、たぶん、きつと冥王を倒すために生まれてきたんだ。この体に眠る竜が、血潮が、毛先の一本一本が……俺を戦場へと駆り立てる。だから俺にはこれしかないんだ」

アルフレッドは自分の手を見つめ、握りしめる。

その思いがどれだけ重いものか、サラやヨミ、いや、アルフレッドにすら分らないほどに。その思いは重く強固で強かった。

「ちっ、ならもう用はないわい。勝手に死ね」

ヨミは辛辣な言葉を吐きかけ、闇に消える。

「アルフレッド……」

サラは今にも泣きそうな表情でアルフレッドを見つめる。

——これが最期だから。

と、アルフレッドは自分に言い聞かせる様に、心の内で呟いた。

「ごめんな、サラ。でも、ちゃんと生きて……未来を勝ち取ってくるからさ。そしたら、俺の村で式を挙げよう。約束してくれるか？」

アルフレッドはサラにそう言った。自分の心に素直な感情であった。

その言葉を聞いたサラは、大粒の涙を頬にこぼし、笑顔を浮かべる。

「うん、絶対だからね」